

II 西原F遺跡4

本文目次

一 遺跡の位置と環境	1
二 調査の概要	2
1. 調査の目的と経過	2
2. 層序	2
3. 遺物の出土状況	4
4. 遺物の概要	4
5. A T下位の礫群	10
三 まとめ	14

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図(旧石器時代)	1
第2図 調査区設定図	2
第3図 D～G-4グリッド西壁土層断面図	3
第4図 III層出土遺物分布図及び実測図	6
第5図 IV a層出土遺物分布図及び実測図	6
第6図 IV b層出土遺物分布図及び実測図	7
第7図 V層出土遺物分布図及び実測図	7
第8図 VII層出土遺物分布図及び実測図	8
第9図 クラック内出土・採集遺物実測図	8
第10図 出土遺物分布図・接合遺物実測図	9
第11図 VII層礫群検出状況	11
第12図 第1礫群実測図	12
第13図 第2礫群実測図	12
第14図 第3礫群実測図	13
第15図 第4礫群実測図	13

表目次

第1表 土層柱状図及び観察表	3
第2表 遺物観察表	5
第3表 礫観察表	10

図版目次

図版1上	完掘状況(北東より)
中	土層堆積状況(東より)
下	第1礫群検出状況(南より)
図版2上	第2礫群検出状況(西より)
中	出土・採集遺物
下左	接合資料
下右	受熱礫

例言

○本編は熊本県阿蘇郡西原村大字河原字大野に所在する西原F遺跡の第4次調査の概要報告である。

○調査は、熊本大学文学部考古学研究室が1999年8月21日～8月31日までの11日間行なった。

○調査及び整理担当者は以下の通りである。

甲元眞之 木下尚子 小畑弘己 杉井健(以上教官)

藤江望 藤木聡 村崎孝宏(以上大学院2年生) 谷直子(以上大学院1年生)

石川まどか 富永明子 峯崎麻帆 村上浩明 山口大介(以上学部4年生) 荒木隆宏 河合章行

木村龍生 橋口剛士 丸山愛(以上学部3年生) 菊池義明 坂口三輝子 坂元紀乃 田代理恵

檀佳克 丸地見典 三浦和之 宮本千恵子 安武寛文 矢羽田幸宏(以上学部2年生)

宮崎拓(別府大学4年生)

○調査・整理については以下の諸氏・機関に御協力・御指導いただいた。(敬称略)

小谷桂太郎(西原村教育委員会) 岡本真也 古森政次 宮崎敬士(以上熊本県教育委員会) 稲津暢洋

岩谷史記 山下宗親(以上熊本市教育委員会) 藤本圭司(熊本県益城町教育委員会) 伊藤昌広 岩永雅彦

杉原敏之 林充彦 山下実 吉留秀敏(以上福岡県旧石器文化研究会) 島岡武(宮崎県川南町教育委員会)

福田正文 鹿本高校考古学クラブ 西原村教育委員会 家畜改良事業団種雄牛センター

○福田正文氏には採集遺物を提供していただいた。

○遺物の実測は整理担当の学生が各自行なった。製図は遺物を丸山が、その他を河合・坂口・田代・宮本が行なった。

○本編の編集は橋口が行ない、執筆分担については執筆者名を各文末に示した。

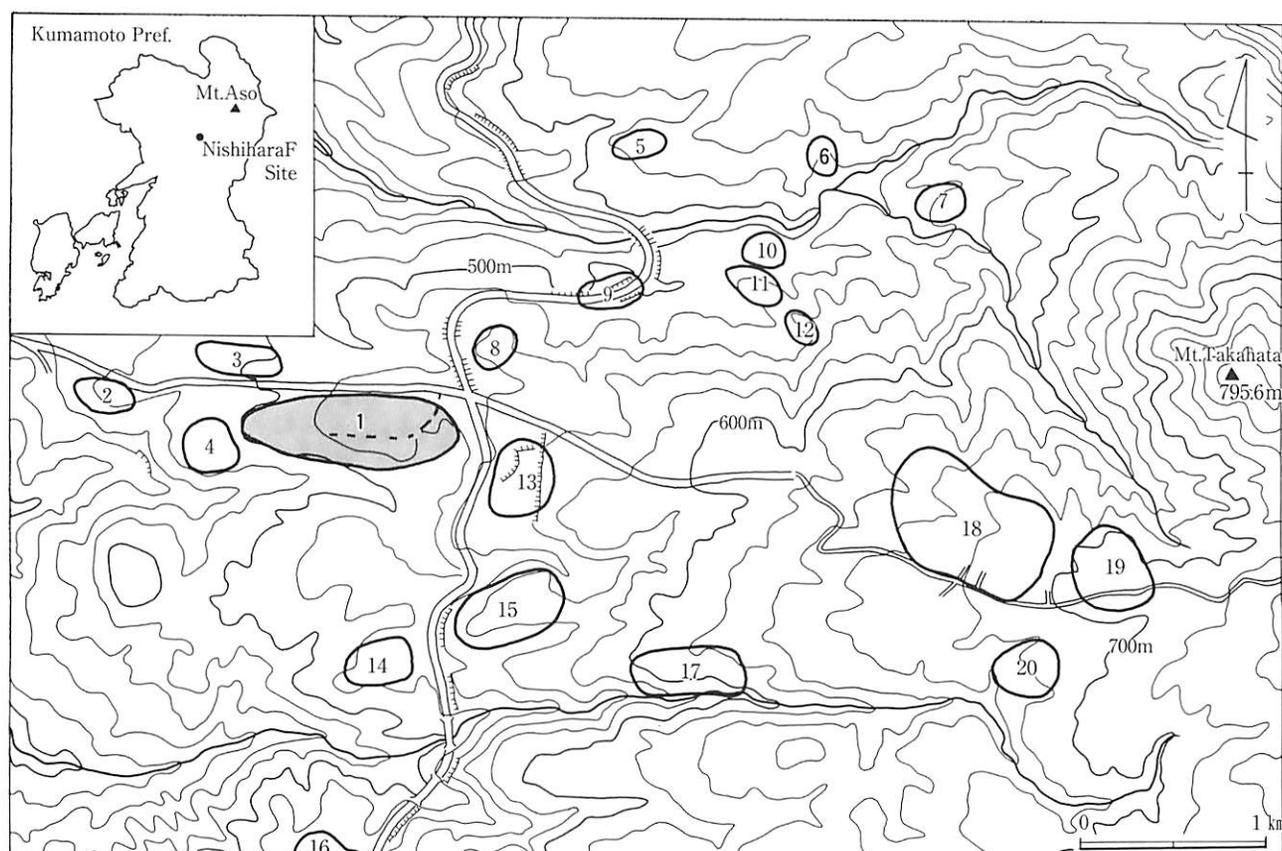
○本編の挿図と図版の遺物番号は対応する。

一 遺跡の位置と環境

西原F遺跡は、熊本県阿蘇郡西原村大字河原字大野に所在し、南北を谷に挟まれた幅狭な尾根上（標高534m）に立地する。かつて遺跡周辺は落葉広葉樹林であったが、牧草地として利用するため、旧地形と比べかなり改変された。また、近年の開発や、地元・近隣の研究者の努力によって新しい遺跡の発見が相次ぎ、周知の遺跡についても資料の増加がみられる。これに伴って周辺遺跡の整理が行われ、熊本県教育庁文化課による遺跡台帳の改訂を機に正式な遺跡名称が付与された。その結果、本遺跡の名称は「河原第14遺跡」となった⁽¹⁾。

本遺跡と周辺遺跡は、いずれも眺望の良い、なだらかな尾根上に立地している（第1図）。近くには小川が流れ、水の確保も比較的容易であったと考えられる。これらの遺跡で確認される旧石器時代遺物は、細石刃、台形石器、ナイフ形石器、三稜尖頭器、剥片尖頭器、スクレイパーなど多彩であり、石材でも西北九州系の漆黒色黒曜石・青灰色黒曜石、東九州系の流紋岩、阿蘇系の気泡の多い黒曜石・風化の著しい黒曜石、そのほか安山岩、チャートと多様性を示す。遺物や石材の種類多様さは、西原村周辺と他地域の関係を考える上で興味深い。（河合）

註（1）本調査は1996年以降の継続調査であることから、混乱を避けるためにこれまでの「西原F遺跡」を踏襲した。
熊本県教育委員会編「熊本県遺跡地図」 熊本県教育委員会 1998



1:西原F(河原第14) 2:河原第11 3:河原第12 4:河原第13 5:河原第22 6:河原第21 7:河原第20 8:河原第7 9:河原第6 10:河原第3 11:河原第4 12:河原第5 13:河原第8 14:河原第15 15:河原第9 16:吉無田高原第8 17:河原第10 18:河原第1 19:河原第2 20:冠ヶ岳第5

第1図 周辺遺跡分布図(旧石器時代)

二 調査の概要

1. 調査の目的と経過

これまでの調査成果

これまでの調査で、本遺跡には百花台型台形石器や始良丹沢火山灰（以下ATと称す）下位の台形様石器を含む6枚の良好な文化層の存在が明らかになっている⁽¹⁾。前回からの課題は、牧草地への進入路部分に包含される石器群の確認、F-5・6グリッドⅦ層中の礫群の広がりを確認することが挙げられる。そこで、本年度は進入路部分に包含される石器群の把握を第一の目的とし、Ⅶ層における礫群の分布と石器群との関係を確認することを第二の目的とした。

本年度調査の目的と経過

本調査では進入路部分を中心にD-1・2・4、E-2・4、F-4グリッドを設定し、昨年調査したF-5・6、G-4～6グリッドの未掘部分と併せてⅧ層上面まで掘り下げた。その結果、Ⅶ層中で礫群が検出され、粗密のある分布を示した。また、壁面にかかる礫群があったことから、さらに範囲が広がる可能性が出てきた。そこで、D-3、D・E-5グリッドまで調査範囲を拡大し、礫群の範囲確認に努め、最終的にⅧ層上面まで掘り下げた（第2図）。

礫群

標準土層図

また、昨年度までに本遺跡の土層堆積状況は明らかとなっているが、Ⅱ層より上部を削平されているため、縄文時代早期以降における本来の堆積状況が不明瞭であった。このため、調査終了後に本遺跡付近の露頭を観察し、標準土層図を作成した。

調査は本年度をもって終了し、4年間の総括を正式報告書として刊行する予定である。標準土層の説明は、そこで併せて行いたい。

調査面積

なお、本年度の調査面積は50m²である。

（河合）

註(1) 藤木聡「付篇 西原F遺跡」『用見崎遺跡Ⅲ』研究室活動報告32 熊本大学文学部考古学研究室 1997
藤本圭司「Ⅱ 西原F遺跡2」『考古学研究室報告』第33集 熊本大学文学部考古学研究室 1998
藤木聡編「Ⅱ 西原F遺跡3」『考古学研究室報告』第34集 熊本大学文学部考古学研究室 1999

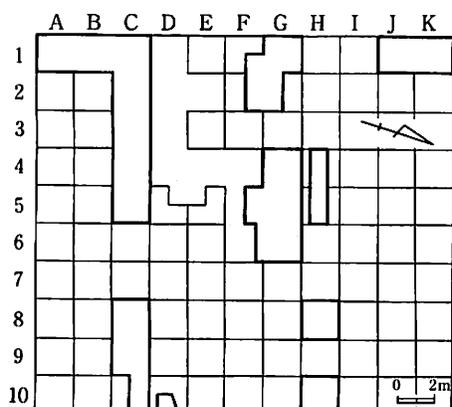
2. 層序（第3図、図版1中）

Ⅵ層の再検討

層序は第1～3次調査のものと基本的に同じである。ただし、昨年度までATを含む層としていたⅥ層について、再検討を迫られることになった。

それは、ATとみなしている火山ガラスはⅤ～Ⅵ層にかけて含まれていることが、明らかになったためである。従って、Ⅵ層はATか、もしくはATより古い時期の堆積である可能性がでてきた⁽¹⁾。AT降灰層準については、土壌分析の結果を待って正式報告書において述べこととしたい。ただ、Ⅶ～Ⅷ層の遺物や礫群はAT下位のものであるという評価に変わりはなく、¹⁴C年代測定の結果⁽²⁾もそれを裏付けるものである。

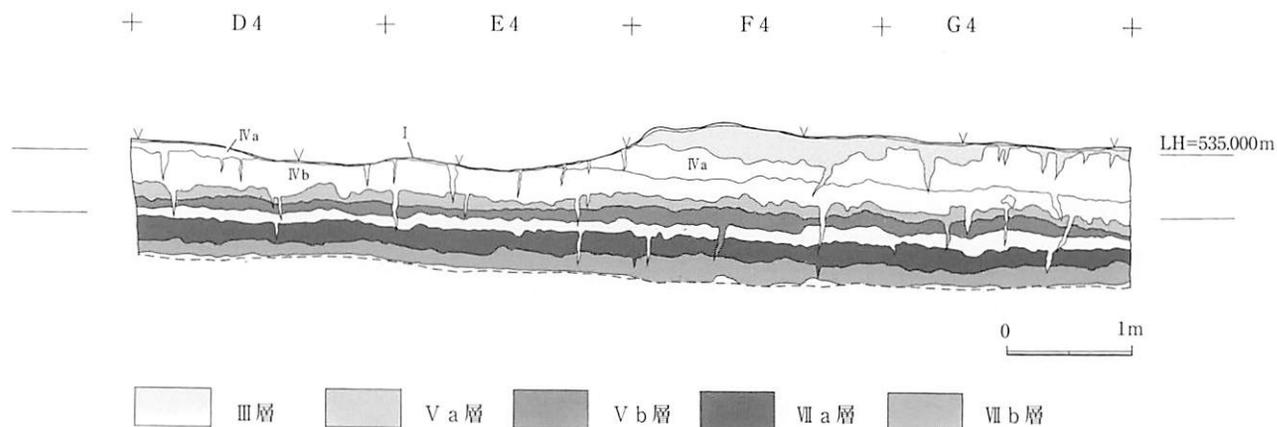
文化層



□ 第1～3次調査 □ 第4次調査

第2図 調査区設定図

昨年度想定したⅡ層、Ⅲ層、Ⅳa層上部、Ⅳa層下部～Ⅳb層上部、Ⅳb層下部～Ⅴ層、Ⅶ～Ⅷ層6枚の文化層について、接合関係と個体別資料を中心に検討した。本年度の資料中には、後述のようにⅣb～Ⅴa層に層を越えて接合する資料が認められ、Ⅳb層下部



第3図 D～G-4グリッド西壁土層断面図

第1表 土層柱状図及び観察表

自然層	色調	特徴	遺物	文化層(仮称)
I 層		表土。アカホヤ (Ah) 火山灰のブロックを含む。	縄文時代早期以降	
II 層	黒褐色土層 (7.5YR3/2)	粒子は細かく、粘性がある。	縄文時代早期後半	第1文化層
III 層	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)	堅くしまり、クラックが発達する。 II層とIV層の漸移層。	細石刃石器群など	第2文化層
IV a 層	褐色土層 (10YR4/4)	堅くしまり、クラックが著しく発達する。	台形石器群 ナイフ形石器など	第3文化層
IV b 層	褐色土層 (10YR4/6)	IV a 層に比べてやわらかく、色調は若干明るい。 粒子は細かい。礫が若干存在する。	ナイフ形石器など	第4文化層
V a 層	暗褐色土層 (10YR3/4)	粘性が強く、堅くしまる。クラックが発達。 礫が若干存在する。	ナイフ形石器など	第5文化層
V b 層	黒褐色土層 (10YR2/2)	V a 層より粘性があり、堅くしまる。色調は暗い。 火山ガラスを多く含む。	剥片、碎片	
VI 層	暗褐色土層 (7.5YR3/3)	明るい色調の火山灰を含み、上下の層より若干 明るい。火山ガラスを含む。		第6文化層
VII a 層	黒褐色土層 (7.5YR2/2)	粘性がある。礫群が存在する。	台形様石器など	
VII b 層	暗褐色土層 (7.5YR3/3)	堅くしまる。礫群が存在する。	剥片、碎片	
VIII 層	褐色土層 (10YR4/6)	径1～5cmの軟質の小礫を含む。	台形様石器など	
IX 層	褐色土層 (7.5YR4/4)	粘性がなく、粒子が粗い。		
X 層	褐色土層 (7.5YR4/6)	中間に礫をはさむ。下部はやや赤みを増す。		
XI 層	明赤褐色土層 (5YR5/8)	粘性がなく、粒子が粗い。		

～V a 層の文化層の存在が改めて確認された。接合関係は少ないが、個体別資料分析の結果も昨年度とほぼ同様の傾向を示している。VII～VIII層の文化層は礫群面を境界に上下に細分できるとも考えられ、文化層についての最終的な結論は、今までの成果を整理して正式報告書への課題としたい。(河合)

註 (1) 古森政次氏(熊本県教育委員会)は、草千里ヶ浜パミスではないかと指摘している。渡辺一徳氏(熊本大学教育学部)は、この地域に草千里ヶ浜パミスはないとしている。
 (2) VII b 層中の炭化物をAMS(加速器質量分析)法によって¹⁴C年代測定を行なった結果、29370±360BP、28790±350BPの値を得た。詳細なデータについては、本編14頁参照。
 (3) 小山正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社 1986

3. 遺物の出土状況

本年度の調査で出土した石器は総数208点であり、それらを含めた第2～4次調査の遺物出土状況を第10図に示した。土器はすべてクラック内で出土し、原位置をとどめていない。

石器の出土状況

出土石器の内容は、製品6点、敲石1点、石核3点、剥片60点、碎片138点であり、各層ごとの出土状況を第4～8図に示した⁽¹⁾。なお、今回は自然層での把握にとどめ、文化層での把握は、接合や個体識別をすすめて正式報告書において述べたい。

Ⅲ層からは剥片3点、碎片4点が出土した。牧草地への進入路にあたる部分は削平が著しく、本来の遺物包含状況を把握できない。

Ⅳa層からは台形石器3点、剥片14点、碎片70点が出土した。D-1・2、F-4・5グリッドで遺物が多い。D-1グリッドでは安山岩製石器の割合が高い。D-2、F-4グリッドでは、青灰色黒曜石製石器が集中する。

Ⅳb層からは石核2点、剥片23点、碎片27点が出土した。遺物数はⅣa層に比べ減少する。D-2グリッドでは良質の安山岩製石器が、F-4グリッドでは層理の発達した安山岩製石器が大半を占める。G-6グリッドは、風化の著しい黒曜石製石器で占められる。

Va・Vb層からは台形様石器1点、石核1点、剥片10点、碎片19点が出土した。遺物は散漫に分布する。D-1・2グリッドでは安山岩製石器の割合が高い。D・E-4グリッドでは黒曜石製石器が多い。

AT下位のⅦ層からは敲石1点、剥片10点、碎片18点が出土した。E-2グリッドで安山岩製石器が集中する。F-6グリッドに風化の著しい黒曜石製石器がみられる。

各層を通じて共通することは、①遺物は散漫に分布すること、②石材によって偏った分布を示すこと、③剥片・碎片が多く、石核が少ないことである。(丸山)

註(1) 第2・3次調査において、F-5・6グリッド(北半)はⅦa層、G-4グリッドはVa層上部、G-6グリッドはⅣb層上部まで掘り下げている。

4. 遺物の概要(図版2中、下左)

出土遺物(第4～8図)

Ⅲ層出土の石器

1は緑色チャート製の二次加工のある剥片である。大形の剥片を素材とし、右側縁部に調整を施す。背面は自然面を残している。

Ⅳa層出土の石器

2・3は黒曜石製の百花台型台形石器である。素材剥片を横位に用いる。2は両側縁部に腹面側からの急角度調整を施すことにより、両側縁上部が角状に突出する。腹面下部に平坦剥離を施す。刃部を欠損する。3は左側縁に腹面側から、右側縁に背面側からの調整が施される。

4は緑色チャート製の百花台型台形石器である。左側縁に背面・腹面両側から急角度調整を施す。右側縁に素材剥片の打面を残す。

Ⅳb層出土の石器

5は流紋岩製の微細剥離を有する剥片である。バルブが発達する。

6は暗緑灰色チャート製の二次加工のある剥片である。背面に打面側より調整を施す。右側縁と左側縁下部に微細剥離が認められる。

V層出土の石器

7は白色チャート製の台形様石器である。不定形剥片を素材とし、両側縁部に腹面側からの粗い調整を施す。末端部を刃部とする。

Ⅶ層出土の石器

8は黒曜石製の微細剥離を有する剥片である。両側縁部に微細剥離をもつ。表面は風化しているため、光沢が少ない。

9は漆黒色黒曜石製の不定形剥片である。周縁をすべて折損する。

10は砂岩製の敲石である。先端部を中心に細かい潰れがあり、右側縁上部に剥離痕を有する。下部を大きく欠損する。

クラック内出土・採集遺物（第9図）

クラック内
出土・採集
遺物

11・12は石鏃である。11は安山岩製、12はチャート製である。II層以上から落ちこんだものと考えられる。

13は緑色チャート製の縦長剥片である。

14は黒曜石製の百花台型台形石器である。剥片の末端部を刃部とする。両側縁に腹面側からの急角度調整を施す。

15は黒曜石製の原ノ辻型台形石器である。求心状剥離によって剥出された不定形剥片を素材とする。右側縁に背面側からの急角度調整を施して打面を除去したのち、背面側の基部に平坦剥離を施す。左側縁は腹面側からの急角度調整を施す。この結果、刃部の両端が突出し、形態は^{まさかり}鉞状を呈する。刃部に使用痕がみられる。

参考資料（第9図16）

参考資料

河原第21遺跡（第1図参照）より採集した。黒曜石製の原ノ辻型台形石器である。不定形剥片を用い、右側縁は背面側から急角度調整を施し、平坦剥離をおこなう。左側縁は腹面側からの平坦剥離と急角度調整によって抉りを作り出す。左側縁部が顎状に突出することで、15と形態が大きく異なる。左側縁部を欠損する。

接合資料（第10図）

接合資料

接合資料は2例あり、剥片剥離によるものはIVb・Va層より出土した。

①安山岩製（a：IVb層、b・c：Va層）

剥離の順序はa→bである。a→bの剥片剥離は同一作業面でおこなわれる。

②黒曜石製（a・b：VIIb層）

折れ面接合である。剥片の中間部が腹面側より折れている。

（丸山）

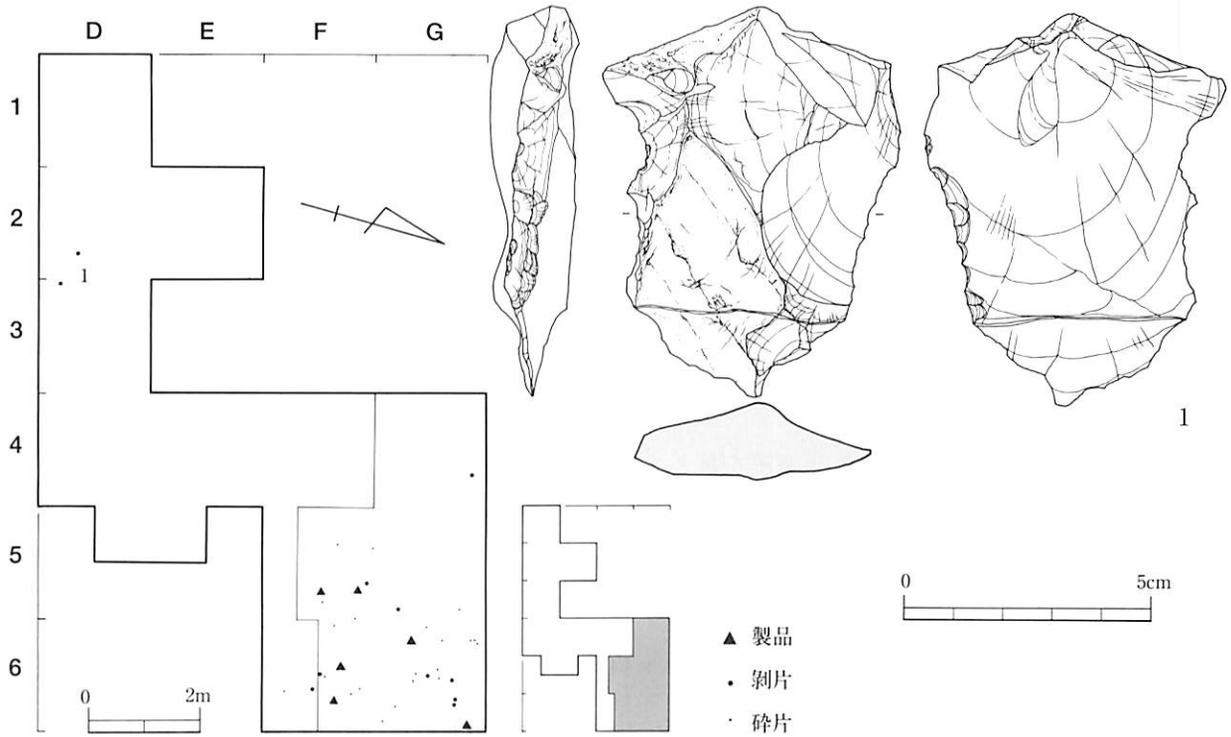
第2表 遺物観察表

図番号	器種	グリッド	層位	長さ(cm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	
第4図	1	二次加工のある剥片	D-2	III	77.7	61.3	17.1	79	チャート
第5図	2	百花台型台形石器	D-3	IVa	(8.3)	(11.8)	2.9	(0.3)	黒曜石
	3	百花台型台形石器	D-4	IVa	9.2	9.5	3.1	0.2	黒曜石
	4	百花台型台形石器	F-5	IVa	16.8	13	2.6	0.7	チャート
第6図	5	微細剥離を有する剥片	D-1	IVb	23.7	25.2	9.4	4.8	流紋岩
	6	二次加工のある剥片	D-1	IVb	20.4	25	5.2	2	チャート
第7図	7	台形鏃石器	D-2	V	28.4	34.5	11.6	7.8	チャート
第8図	8	微細剥離を有する剥片	E-2	VIIb	19.3	14.1	6.9	1.4	黒曜石
	9	剥片	F-6	VIIb	(20.2)	(21.5)	5.3	(1.9)	黒曜石
	10	敲石	D-3	VIIa	(46.1)	23.1	10.3	(15.2)	砂岩
第9図	11	石鏃	D-1	II (クラック)	23.3	14.8	4.3	1.3	安山岩
	12	石鏃	E-4	II (クラック)	(25.5)	(11.4)	(5.7)	(1.2)	チャート
	13	剥片	-	採集	41.5	18.6	9.1	6.3	チャート
	14	百花台型台形石器	-	採集	13.1	12.3	4.2	0.6	黒曜石
	15	原ノ辻型台形石器	-	採集	19.5	23.8	6.6	2.2	黒曜石
第9図	16	原ノ辻型台形石器	-	採集	25.3	(20.2)	8.3	(3.4)	黒曜石
第10図	①a	剥片	D-1	IVb	15.8	20.6	4.2	1.3	安山岩
	①b	剥片	D-2	Va	12.6	10.7	2.7	0.3	安山岩
	①c	剥片	D-2	Va	(19.2)	30	4.3	(1.8)	安山岩
	②a	剥片	E-2	VIIb	15.8	13.6	6.5	1.2	黒曜石
	②b	剥片	E-2	VIIb	20	13.7	6.5	1.6	黒曜石

* () は現存する中での最大値を示す。

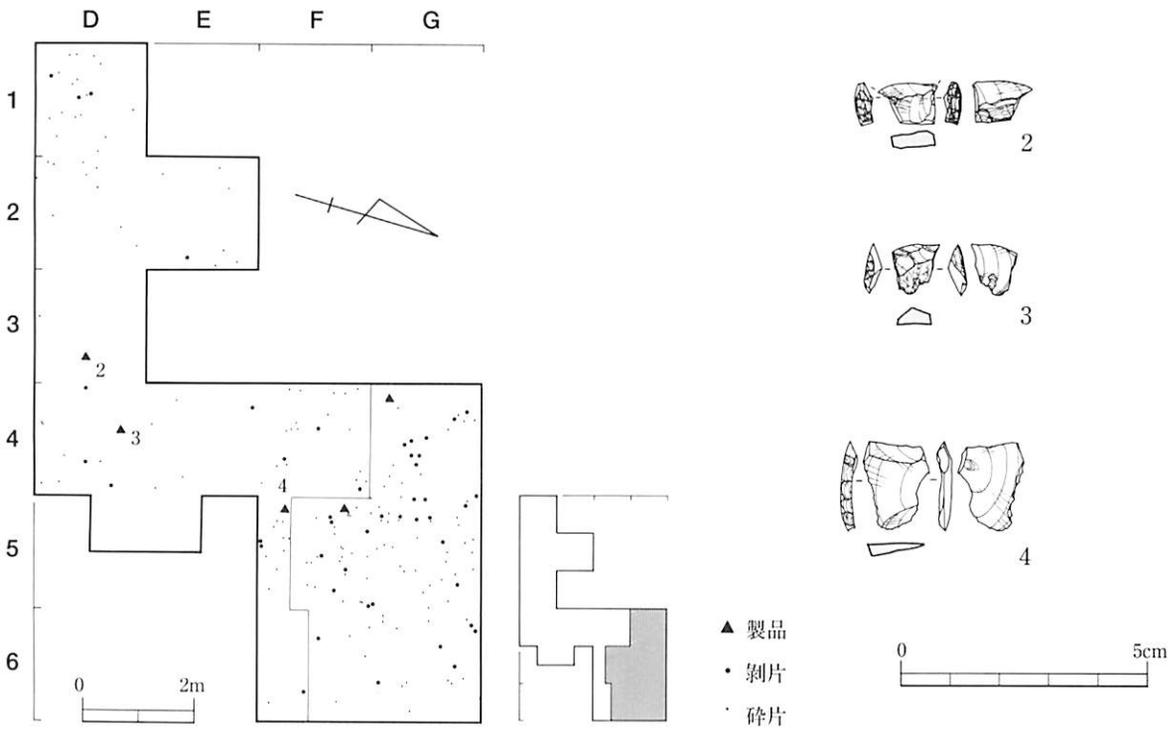
* 16は福田正文氏による採集品である。

二 調査の概要

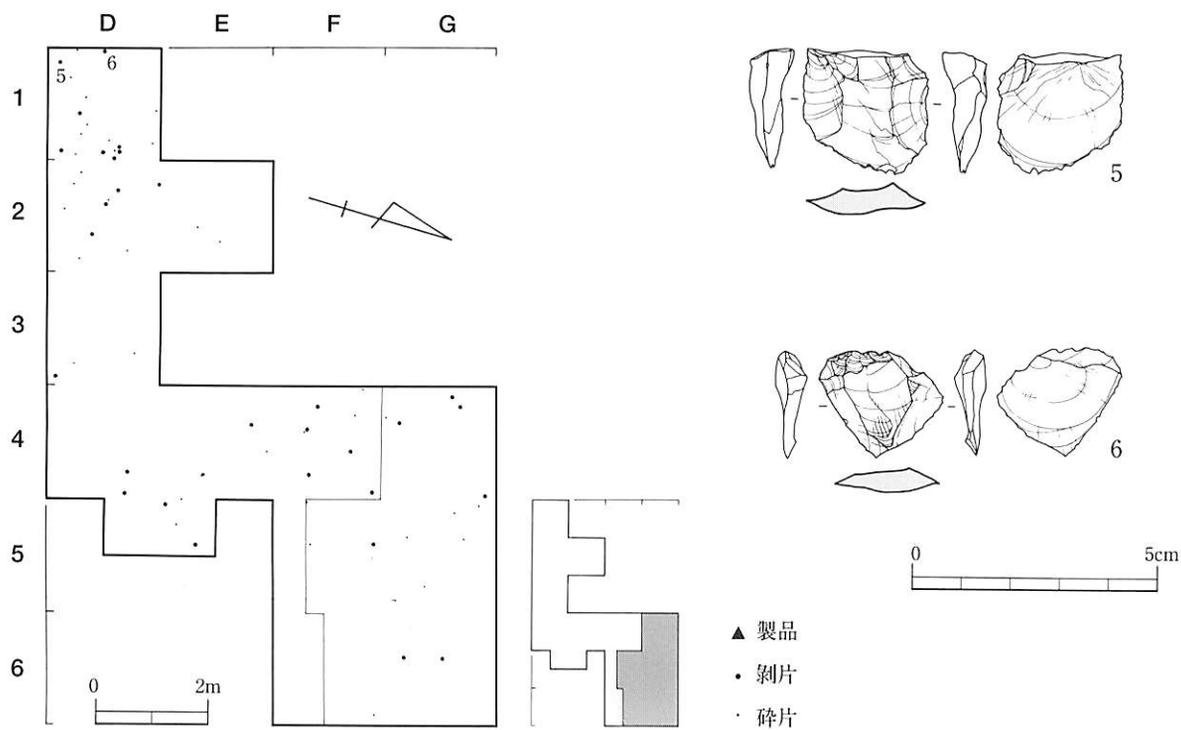


第4図 III層出土遺物分布図及び実測図（遺物S = 2/3）

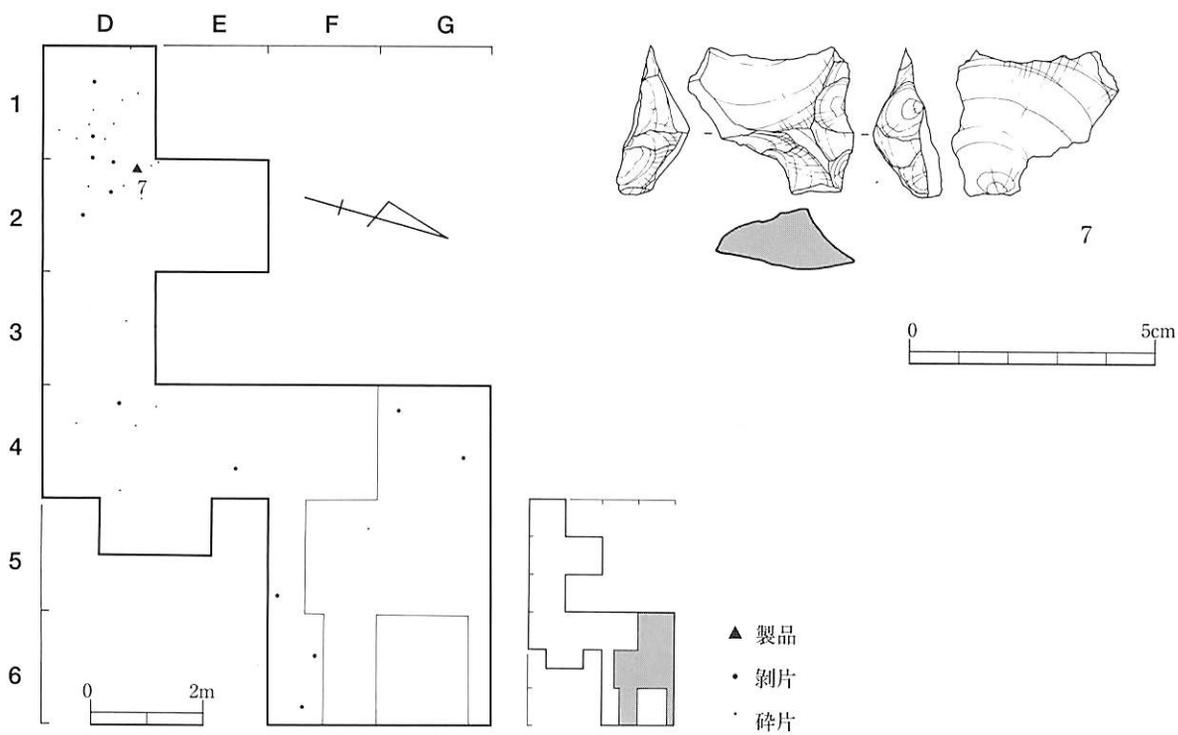
*トーン部分は第2・3次調査区である。なお、遺物は第2・3次調査で出土したものを含む（以下第8図まで同様）。



第5図 IV a層出土遺物分布図及び実測図（遺物S = 2/3）

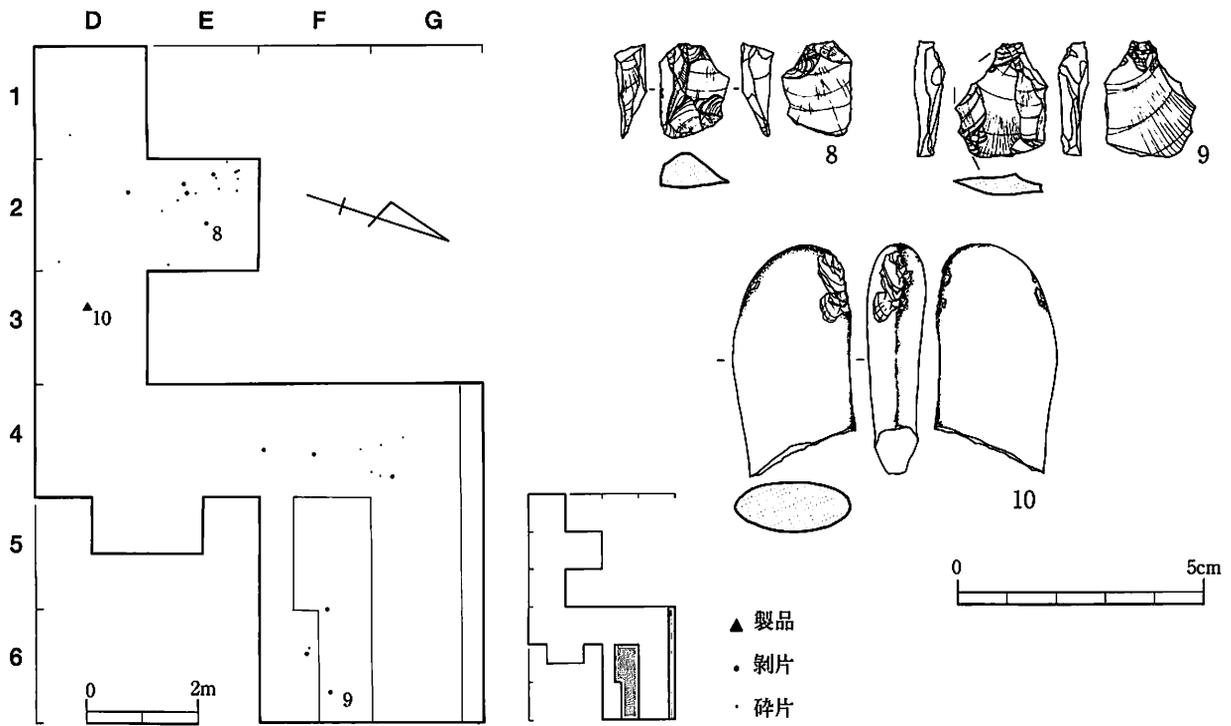


第6図 IV b層出土遺物分布図及び実測図 (遺物 S = 2/3)

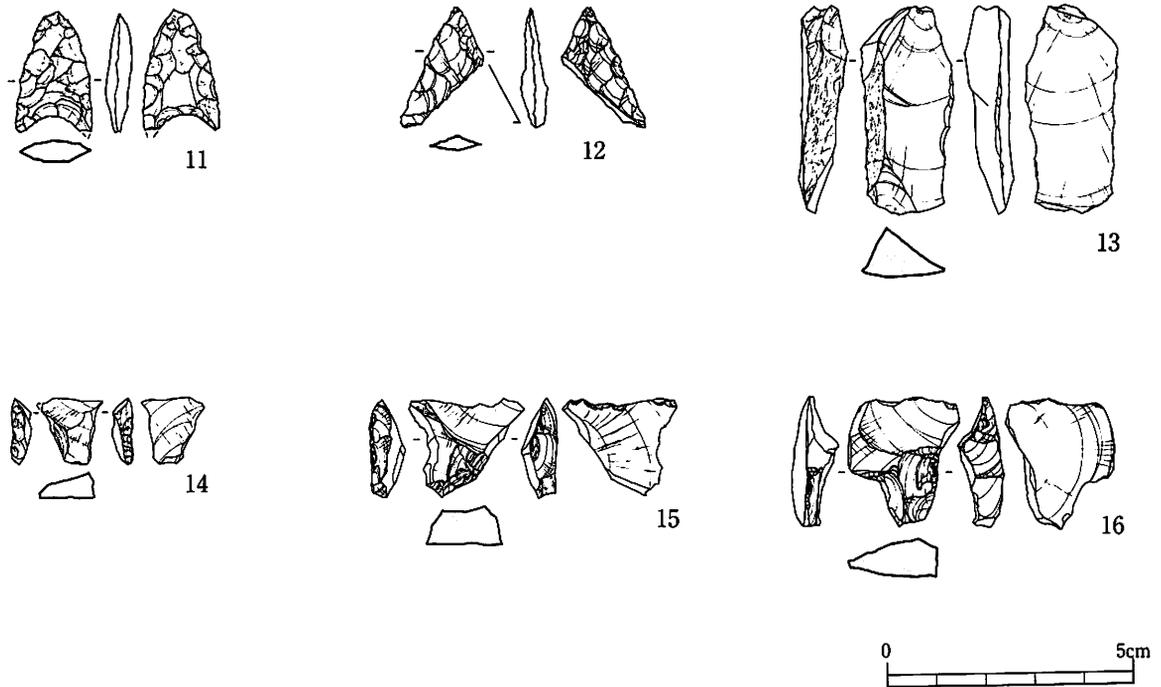


第7図 V層出土遺物分布図及び実測図 (遺物 S = 2/3)

二 調査の概要

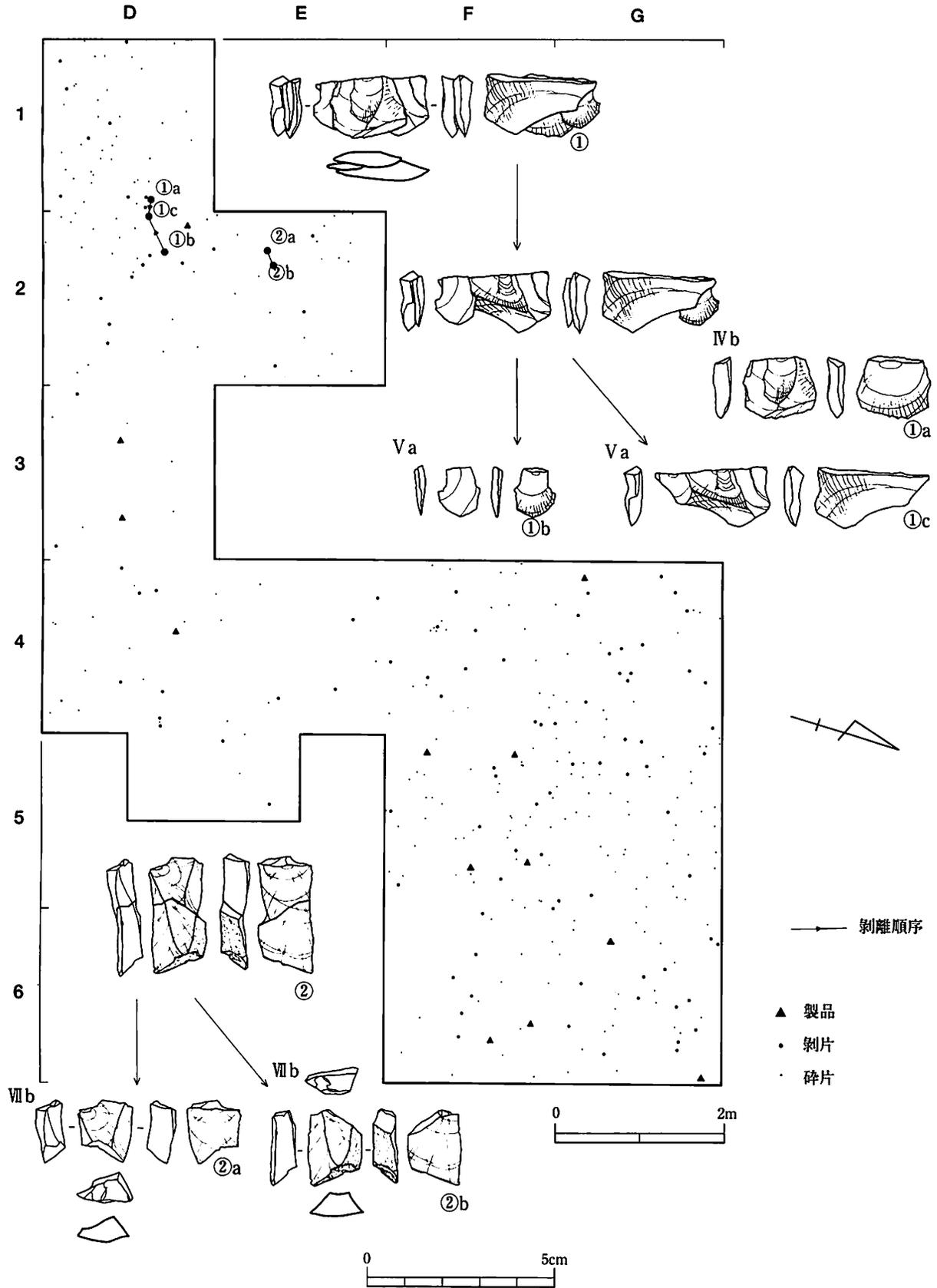


第8図 Ⅶ層出土遺物分布図及び実測図 (遺物 S = 2/3)



第9図 クラック内出土・採集遺物実測図 (遺物 S = 2/3)

(11・12はクラック内より出土、16は河原第21遺跡より採集)



第10図 出土遺物分布図・接合遺物実測図 (遺物 S = 2/3)

* 遺物は第2・3次調査で出土したものを含む。

5. AT下位の礫群（図版1下・2上・下右）

礫検出状況 AT下位のⅦ層中から礫を184点検出した。礫はⅦb層の中間を底面とし、Ⅶa層にかけて存在する。粗密のある分布を示し、特にD・E-2グリッド、D-4グリッド、F-5・6グリッド、G-5・6グリッドで集中している。これら礫の集中分布地点を順に第1～第4礫群と呼ぶ（第11図）。今回の調査範囲で礫群として認められるものはこの4基である。

炭化物 第1・第2礫群の周辺で、径2～5mmの炭化物が多く検出された（第12・13図）。その分布状況は礫群の底面付近に集中していたが、掘り込みは検出できなかった。自然のくぼみを利用していただとも考えられる。

礫の接合 接合は11例確認され、その大半が50cm以内の距離にある礫どうしの接合である。接合した礫の大半は、完形時の8割程にその形状を復元することができた。

礫の特徴 形状は角礫であり、扁平なものが多い。大きさは拳大強であり、ほとんどが破損している。礫重量は平均203gであり、中には1500g前後のものもある。

石材は火山岩が大半を占めている。また、気泡が多く認められるものや、節理に沿って割れるものなど、もろいものが多い。

礫の赤化と付着物 礫赤化率は全体で83%、破損礫の割れ面赤化率は62%で、礫の大半は赤化している（第3表）。表面にタール状のものや、煤が付着するものもある。このことや周囲で炭化物が検出されていることなどをあわせると、礫は火の使用の結果、熱による変化を受けたものと判断できる。

礫の分布状況や接合の成果などを加味すると、礫は使用された後に遺棄された可能性が高く、その後の二次的な利用や移動の可能性は低いと考えられる。

Ⅶ層出土の石器と礫群 Ⅶ層より出土した石器は、礫群に伴うものと、礫群の下より出土するものがあった。このことより、今まで同一とされたⅦ層の石器群は、礫群の形成時期に伴う石器群と、それ以前のものに分けられる可能性が出てきた。

なお、このような礫は、遺跡がある尾根上には自然礫として存在しないことから、遺跡周辺にある谷・河川などで採集されたのち、遺跡に持ち込まれたものと考えられる。（橋口）

第3表 礫観察表

	全体	第1礫群	第2礫群	第3礫群	第4礫群
礫点数	184	31	65	15	36
礫平均重量 (g)	203	141	278	128	161
礫の平均の大きさ (cm)	7.0×5.1×3.1	7.1×4.9×2.6	7.8×5.5×3.2	6.0×4.6×2.4	6.4×5.0×3.1
礫破損率 (%)	95%	97%	95%	93%	86%
礫赤化率	83%	68%	92%	80%	100%
割れ面赤化率	62%	52%	77%	40%	72%
付着物残存率	36%	35%	83%	33%	44%

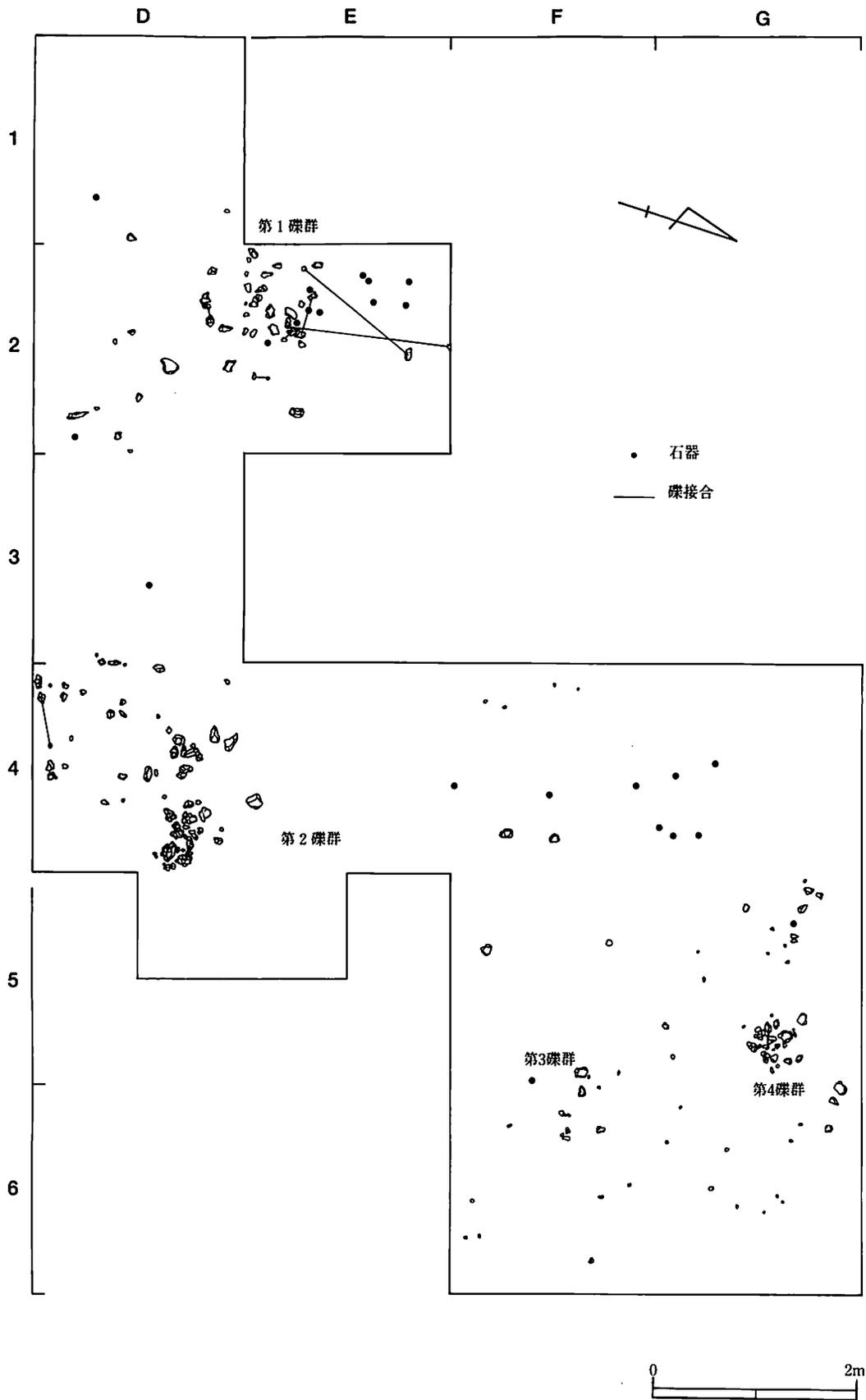
*礫の平均の大きさ：長さ×幅×高さ

*礫の破損率：破損礫数/礫点数

*礫赤化率：赤化礫数/礫点数

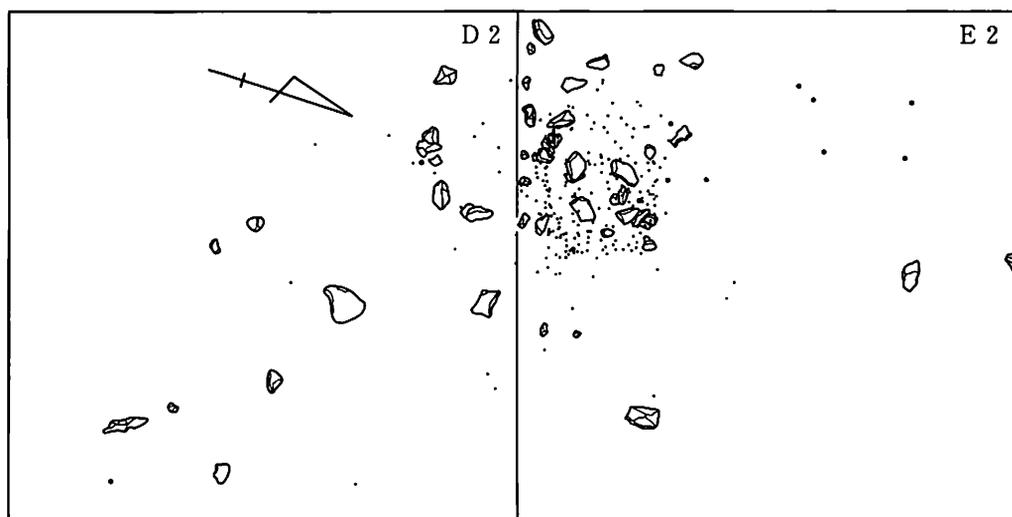
*割れ面赤化率：割れ面赤化礫数/礫点数

*付着物残存率：付着物残存礫/礫点数

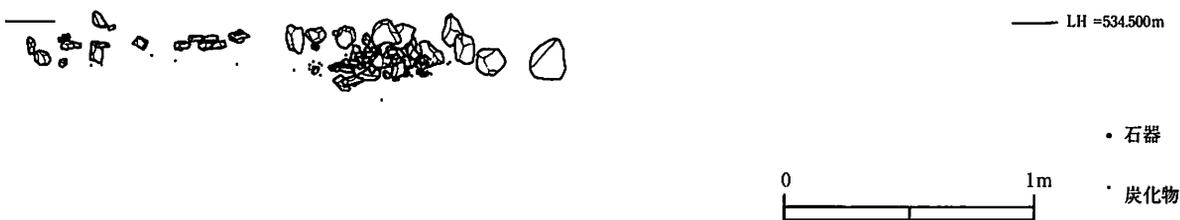
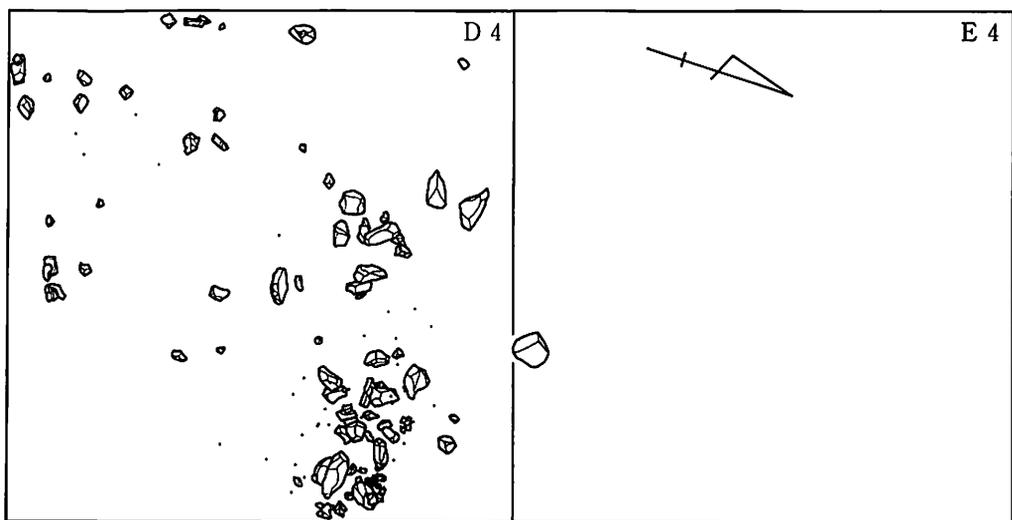


第11図 VII層礫群検出状況

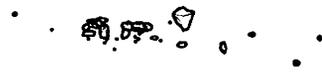
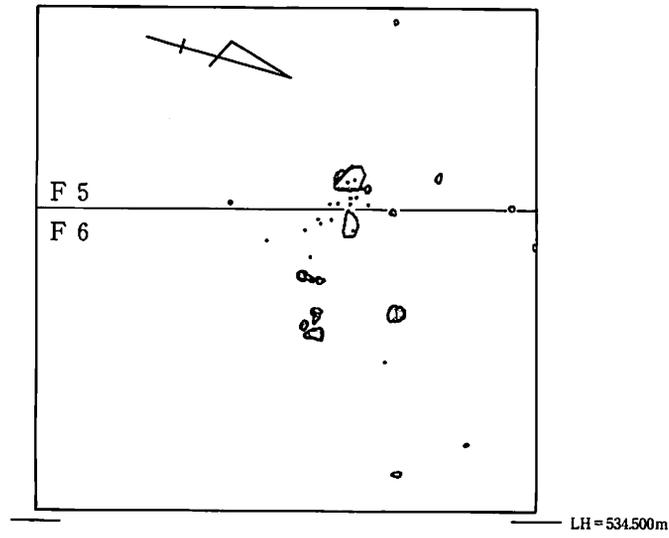
二 調査の概要



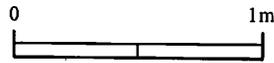
第12図 第1礫群実測図



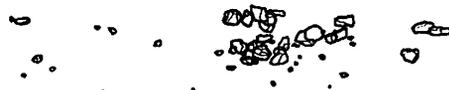
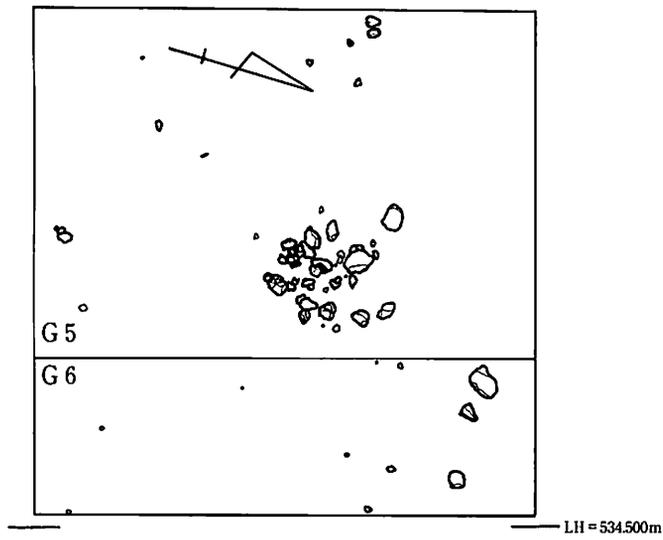
第13図 第2礫群実測図



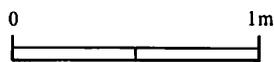
● 石器
● 炭化物



第14図 第3 礫群実測図



● 石器
● 炭化物



第15図 第4 礫群実測図

三 まとめ

これまでの調査により、本遺跡は縄文時代・旧石器時代あわせて6枚の文化層を包含していることが確認された。特に、百花台型台形石器や、A T下位の台形様石器を伴う石器群が層位的に確認されたことは、大きな成果として挙げられる。

本年度調査の課題

本年度調査の課題は、未掘であった牧草地への進入路部分に存在する石器群の把握と、F-5・6グリッドⅦ層中の礫群の広がりを確認することであった。

調査成果

調査の結果、全調査区をⅦ層上面まで掘り下げ、石器は全体的に散漫な分布を示し、特にまとまって分布する箇所はなかった。しかし、出土した石器の中で、百花台型台形石器・敲石は昨年度までの調査成果を補強する資料として重要である。

百花台型台形石器

Ⅳ a層から出土した百花台型台形石器は、素材剥片の打点部・末端部・中間部を用いるなど、多様性を示す。素材の部位を意識していないとするよりも、素材として使用可能である部位を積極的に用いた結果と考えられる。

敲石

Ⅶ a層出土の敲石は、これまでの調査を通して初の出土例となった。砂岩製で、軽量かつ平坦・細長のものである。石器の細かい調整に用いられ、右下縁部の欠損の後に廃棄されたものと考えられる。

原ノ辻型台形石器

また、本遺跡と河原第21遺跡（第1図参照）において、原ノ辻型台形石器が採集された。双方ともに漆黒色で良質の黒曜石を用いている。素材の使い方・調整法において共通点をもつが、完成時の形状が^{まさかり}鋳状のものと、左側縁部が顎状に突出するものとの特徴が異なる。同石器が阿蘇周辺で採集されたのはこれが初めてであり、これからの資料の増加が期待される。

A T下位の礫群

本年度調査の最も大きな成果は、Ⅶ層から礫群が検出されたことである。分布状況から礫群として把握できたのは4基である。礫群の周囲や直下で多くの炭化物が検出され、礫表面に赤化や煤・タールの付着がみられるものもあった。火を使用した結果と考えられる。

また、礫群はⅦ b層の中間辺りで形成され、その面を境界として上と下で石器が出土することから、Ⅶ層中の石器群は礫群の存在する面によって礫群形成時期に伴うものと、それ以前のものとに分かれると想定できる。

礫群の年代

礫群の年代については、第1礫群・第2礫群から検出された炭化物を用いて、AMS（加速器質量分析）法による¹⁴C年代測定をおこなった。この結果、第1礫群は 29370 ± 360 BP、第2礫群は 28790 ± 350 BPの年代値を得た⁽¹⁾。

九州地方でA T下位の礫群が検出された例は近年増加しているが、黒色帯下部から出土する台形様石器を伴う石器群と共伴する礫群は極めて珍しい。それ以前の石器群を伴う礫群の検出例は、鹿児島県中種子町所在の立切遺跡において3万5千年前の礫群が1基、同県南種子町所在の横峯遺跡で3万年前の礫群が3基検出された例がある⁽²⁾。今回の例は、この2例に続くものとしてとらえることができる。また、これらを含めA T上位の礫群とを結ぶものとして、今後の礫群研究において大きな意義を持つであろう。

なお、今回で本遺跡の調査は終了した。今後、4年間の調査で得られたものをもとに多角的な視野から分析を行い、その成果を正式報告書として刊行する予定である。（橋口）

註（1）¹⁴C年代測定値はBETA ANALYTIC INC.において、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正値を加えて算出した年代である。Libbyの半減期5568年を用い、 $\delta^{13}\text{C}$ の値はそれぞれ-24.5、-27.5を用いた。補正前の¹⁴C年代測定値はそれぞれ 29360 ± 360 BP、 28830 ± 350 BPである。

（2）倉元良文・堂込秀人編『横峰遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）南種子町教育委員会 1993
堂込秀人『種子島の旧石器文化』『日本考古学協会1998年度沖縄大会研究発表要旨』日本考古学協会 1998